

(5) 【国民運動】 2022年1月12日 (水曜日)

「核禁条約参加を」の声広げる

(1面のつづき)

核実験で被ばくした第十三光栄丸の漁船員は、何を訴えたのか。

実験禁止を訴え

三浦でヒキニ事件を粘り強く追ってきたフリーライター・森田喜一さんの手元には、「第十三光栄丸船員一同の原水爆実験禁止の訴え」と大書きされたビラが残っています。その年のメーデーで漁船員が配ったもので

「私共は三崎町立の国保病院に時たまみて

被ばくマグロ漁船入港 三浦市民の思い

もろっておりませんが、白血球が四千から五千を上下しております。気のせいかもしれませんが、そういう状況に置かれるいようです」

「五十余日陸の見えない海上にゆられながら一日五時間と休まずに働きました。全く命とひきかえに得た魚を厚生省の命令で三昼夜も走り続け沖に出て棄(す)てました…一生涯忘れられることは出来ません」

最後に、全国に向けて「損害補償の即時支給、被害者の生活の保障を。公海の自由を。原水爆の実験禁止を。そして全世界の平和を」と訴えています。



ヒキニの資料を手に説明する小林直樹市議

森田喜一さん

小林さんや森田さんの調べで、三浦でマグロを廃棄した漁船は159隻にのぼると判明。小林さんは「第五福竜丸だけでなく、被害漁船がいるのに、放射能検査をその年で打ち切った。核実験で被ばくした第十三光栄丸漁船員らを救済するどころか、廃棄漁獲物の補償を中心に米側が日

本側に200万ドルを払う『政治決着』で事件の幕引きを図り、事件を封印し切り捨ててきた。ひどい話です」と怒ります。

さらに、小林さんはマーシャル諸島訪問で米国が広島、長崎に原爆を落とす翌年の46年から核実験を行った

事実を知って衝撃をうけたと振り返ります。58年までマーシャル諸島のヒキニ環礁で23回、エニウェトク環礁で43回も核実験を続けました。「40年たっても故郷の島に戻れないというのはいすごい不条理だと思いました。避難した先の島でも上下

水道がないなど衛生状態は悪く、食料も米国からの支援物資頼みだと知って、余計不条理を感じました」

三浦で起きたヒキニ事件を語り継ぐと実行委員会形式で、2014年に被災60周年集会を開き、「核兵器廃絶平和都市宣言」の宣言文の銘板を三浦市に寄贈しました。

三浦市核兵器廃絶平和都市宣言

(平成3年3月18日三浦市告示第11号)
真の恒久平和は、人類共通の志願である。しかしながら、核軍備は依然として残っており、世界平和と人類の生存に深刻な脅威をもたらしている。我々は、世界最初の核被爆国として、また、1954年にアメリカのヒキニ環礁での水爆実験により大きな被害を受けた経験を持つ三浦市民として、核兵器の恐ろしさ、被害者の今なお苦しみをかみしめ、この地球上に再び広島、長崎のあの惨禍を繰り返させてはならないと、全世界の人々に訴えるものである。ここに我々は、非核三原則(作らず、持たず、持ち込ませず)の完全な遵守を求めるとともに、あらゆる国の核兵器の廃絶と軍縮を願い、日本国憲法に掲げられた恒久平和の理念を日常の市民生活の中に生かし、子々孫々に継承するため「核兵器廃絶平和都市」であることを宣言する。

平成27年2月 青龍「ヒキニ被災60周年・三浦市民集会」実行委員会

メーデーでまかれた「原水爆実験禁止の訴え」



22年は、「被爆者と

ともに核実験被ばく者

同じ新婦人三浦支部の重田裕美さん(63)は、「日本政府が核兵器禁止条約に参加しないのはおかしい。核被害があったのは広島、長崎だけじゃない。こ

三浦市の元小学校教員で新日本婦人の会三浦支部の伊藤令子さん(71)は、「60周年集会で初めて実行委員会になるまで三浦のヒキニ事件は知りませんでした。禁止条約が批准されたものと、広島、長崎と同じようにヒキニ事件の全体像を教える平和教育が必要ですよ」と話します。

小林さんも、「ヒキニ事件の真実と条約の意義を市民の間に広げる活動をもっと強めた